

空



2016・10・11

SORA 69号

銀
漢

柴
田
佐
知
子

潮焼けの太きを項とは言はず

漁了へし男ら酔ひて浜昼顔

嫌はれてゐることを蛇知つてをり

算数ができて出てゆく捕虫網

傷口を誇つてゐたる日焼の子

日の暮れて村の寄合みな素足

夏痩せて筋の通らぬことを言ふ

星涼し眠りの早き漁師町

仏壇の奥に勲章蟬しぐれ

日輪を呑みたる灘や土用過ぐ

夏深し仏具屋に買ふ父のもの

転がれる蟬掃けばぢと鳴きにけり

蟪蛄の己が力を疑はず

まづ鯛を神に捧げて在祭

銀漢やどの子も都市に働いて

伊藤通明 一周忌

— 『俳句四季』 九月号より —

とこしなに師のなき月の満ちにけり

福岡 高倉 和子

山裾に潮の満ち来る盆の月

帰省して思ひ出しだることばかり

水底の石揺れてゐる秋気かな

悪女とも呼ばれずつまらなき夜長

夕月夜この世のほかのこと思ふ

月光の一本道に父とはは

裏木戸の裾より朽ちて鷹渡る

笑ひ過ぎしあとの淋しさ赤のまま

東京 中田みなみ

稲穂波お座敷列車通りけり

霧切れてくる千本の檜苗

咳込むは辰雄か霧の軽井沢

種袋にすり寄り鯉の懐し気

鉈彫の仏に森の栗供ふ

寄り道の好きな子に付く牛膝

高原の月が眩しむテニスの灯

庭下駄の感触秋も深まりぬ

長崎 荒井千佐代

埼玉 服部早苗

黍あらし黒煙上げて巨船発つ

ほの暗き水音売りけり金魚店

海霧深き隧道三つ夕弥撒へ

遠き日の恋や和蘭陀獅子頭

引き寄する纜太し星月夜

舳振り青葦の湖反転す

精神論言はずにをれぬ菫の花

紫陽花あをく北斎に転居癖

撫子を父母の遺影の前に活く

役僧の来てはかどれる藻刈かな

秋昼のオラシヨは寄する波のごと

花菖蒲目に丁字麩を口の中

畦行くや来るな来るなと曼珠沙華

西日射す三省堂のコンサイス

血縁のどろどろとあり風の葛

夏深しエディット・ピアフの低き声

福岡 柴田志津子

子が提ぐる家路の金魚揺れどほし

鉄棒に陽はぎらぎらと夏休み

金輪際合掌とかぬ滝行者

外井にて祭の足を洗ひけり

夏草のかくしてしまふ水位標

早稲の出来ほめ合つてゐるゴム草履

藁で結ふ間引菜とどく厨口

突堤に老いし海士立つ秋の雲

福岡 岸 洋子

小説を読むにも力秋暑し

住み慣れて凡の日々好し草の花

連休に埋もれ沙汰なき敬老日

身を反らし大菊鉢を抱へ来る

菊見とれ記念写真に漏れにけり

簡単な相続放棄ねこじやらし

大文字何かがひとつ終りけり

一人居も楽し風船葛かな

北九州 深川 淑枝

兵庫 戸栗 末匿

蓮咲くや沼みしみしと陸を押す

あをあをと海の展くる茅の輪かな

人乗りて舟の揺れたる蓮見かな

幼な子の声に囲まれ蟬生る

ひそかなる沼の満ち干や蓮咲けり

さまざまな船の通へる籐寝椅子

藤の実に風の重さの見えはじめ

方丈の裏の茗荷の子沢山

飛石や涼しき位置に次の石

涼しさや髭ながながと深海魚

糸のころや肩幅ほどの蟹の路地

狛犬の口開けてある秋暑かな

雲を押す雲や鯨来る潮の色

葡萄摘む山の夕日に手をかざし

対岸へ航の短し盆の僧

来る風のみな鮮しき花畑

熊本 松田 明子

白装束闇に蠢く踊かな

亡者踊風になびかぬ黒頭巾

蹴出しの色こぼしてゆきぬ阿波踊

踊子のバスで運ばれ阿波踊

地震あとの辻に人寄る地藏盆

糸田 宮井 知英

羽抜鶏一羽となりて更に鳴く

鶏小屋をはみ出してゐる今年藁

広げ干す行衣の雫鴟高音

踏み入れば魔界なりけり芒原

少しづつ古墳暴かれ草紅葉

大阪 井上和子

代替りして故郷の秋の蟬

寝つかれぬままの故郷虫しぐれ

花筒へ注す新涼の山の水

蟻蛸とぶ墓地にて僧を待つてをり

夕焼の里を見下ろす父祖の墓

東京 山田 正子

手花火に赤い鼻緒の浮かびたる

音だけの花火に出窓開きけり

打ち水の後に雨来る石畳

月光を浴びて折鶴飛びさうな

月光の真直ぐ届く一夜干し

福岡 田代 貞香

盆僧の声を嗶して帰りけり

土壁の片陰つゞく寺の町

水中花いつしか恋に遠くなり

ひぐらしやたつぷりと聴く姉の愚痴

月見草姉はひつそり老いゆけり

東京 今井 春生

山の子や橋より飛んでのし泳ぎ

古びたる蛇口の記憶秋暑し

諍ひののちの寂しさ葡萄食ぶ

秋の虹人形はみな前を向く

秋の雲今日は詩人になれさうな

宮崎 田代 民子

開け放つ耳門山門涼あらた

箒目に一雨欲しき盆の入

湯気を力に白玉の浮いて来し

頼りなき割箸の足迎へ馬

本堂に五彩はためく施餓鬼幡

福岡 あさなが捷

思ふことすべて告げたき新酒かな

ご近所のどこもごちそう村祭

秋の雷常に良妻とはいかず

月代や狐奈落に飛び込みし

かがり火に顔立ち上がる神楽かな

岡垣 田中とし江

炎天や己も遺失物のごと

百万の団扇の風や祇園祭

日盛りや野菜に種の太る音

箒草どこが芯やら葉末やら

いつせいに近所灯る氷雨の夜

千葉 原 友 子

風はたと止みたる月下美人かな

麦藁帽時代遅れも悪からず

ワイン煮のいちじく何かはにかめる

鉛筆のすぐ突き当たる蟬の穴

二丁目の角を曲がれば新豆腐

太宰府 西住三恵子

神の田の新藁まじへ注連を縋ふ

師の話す猿酒てふを疑はず

地下街や亡き師の姿あるビール

診断のつかぬ漫そぞろや西瓜割る

秋の日やさゆらぎもなき日章旗

福岡 山 内 碧

夏深し大樹の裾に風の道

白シャツの折目正しく歩きけり

甕の底青大将がとぐる巻く

小屋一杯に妣の農具や秋彼岸

母の影うすれゆく里秋茜

福岡 白水良子

海の日は海に逝きたる子と過す

天の川そこは亡き子の現住所

七夕に生れし吾子の遺影かな

久住より風の乱るる芒原

神在す森を揺がす大花火

糸島 小林朱夏

天道虫畳む服より飛び出せり

挨拶を屋号で交す盆参り

綿菓子を持て余しをり放生会

檸檬なる番犬に根を嚙られて

芒野の迫つてゐたる無縁塚

粕屋吉田 葎

秋気澄む古墳はとうにただの山

店員がみな出迎ふる渡御の列

神鈴に混じつてゐたる蚊の捻り

御神輿を送りしあとの草ひばり

めんどりのそ知らぬ顔やばつたんこ

福岡 永淵 恵子

青嶺また青嶺四万十水まんまん

したたりの讃岐七富士揃ひ立つ

大歩危の早瀬に乗りし遊び舟

夏遍路太平洋を右に見て

星涼し骨までゆるぶ道後の湯

太宰府 山本 則男

秋風や釈迦の持たざる土踏まず
わたなかの渡船の音も秋のこゑ
防人の烽火台より赤とんぼ
天空の風の記憶に鳥渡る
猪垣を魚網で綴る安曇族

粕屋 秋 千 晴

子供会出目金ばかり追はれぬる
杖ついて来る人増えし孟蘭盆会
俎の蟹が鋏を荒ららげし
川蟹が出刃包丁を挟み込む
割箸をかませし蟹を真二つ

福岡 樋口みのぶ

路地いまは土のなき径秋暑し
盲導犬にしづかな余生秋の雲
大花野過ぎゆく雲の彩なせり
満月やむかし栄えし漁師町
飯椀の栗のみ食べて子の眠る

大阪 田岡 千章

下闇や巳様に供ふる生卵
でまかせに飛びて弾けて金亀子
青山椒噛み叱られてゐる心地
滴りを南無とぞ享けむ岩祠
水打つて「おかへりなさい」「ごくらうさん」

福岡 矢野百合子

花火師の闇を操る影険し
髭先で出かた待ちゐる油虫
黙祷の合図に黙す蟬時雨
如己堂の二畳一間の灼けし色
一すぢの道美しき孟蘭盆会

長崎 松尾龍之介

鯰跳ねて晩夏の山河たしかむる
噴水の胴上げしたる二日月
雨乞ひの鉦となりけり鉦叩
新涼の影も日向も良かりけり
はじまりの桜もみぢの黄葉色

福岡 亀井紀子

動かざる青大将や我もまた
家猫の上見横見の金魚かな
つなぐ手の前へ右へと秋祭
草の花あの子この子も親となり
船底に収まりきれぬ秋刀魚かな

京都 天谷翔子

ソーダ水そつと媚薬を注ぎけり
天気予報はづれて白靴の男
蝮酒飲み干してより告げられし
菊酒や先に逝くなど言はれても
靴揃へゐる子がひとり地藏盆